

---

◇ 小 池 昌 人 ◇

○議長（村松 積） 次に、1番、小池昌人君、質問を許します。登壇願います。

1番、小池昌人君。

○1番（小池 昌人） 1番、小池昌人です。

先に通告いたしました行政のスリム化と生活コスト軽減施策について質問をさせていただきます。

ただいま、村長の施政方針の中にも重複する部分があるかと思えます。

各自治体の財政状況が思わしくない中、財政改革、行財政改革、あるいは行政のスリム化ということがことあるごとに一層聞かれるようになりました。平成の合併問題が浮上する中、当下條村は平成16年にいち早く自立の道を選択され、役場職員の意識改革と職員数の削減、公共下水に頼らない合併浄化槽の選択、資材支給事業を主とする住民の共同作業による公共事業の削減等々、行政のスリム化により自治体の健全度を示す実質公債費比率はマイナス0.2%となり、県内ではずっとトップにあった軽井沢を抜いて1位となり、全国の1,727市町村と東京都23区を合わせて1,750ある自治体の中でも4位という財政健全となったことは驚きであります。

歳入における村税の割合が13%前後で、財政力指数も0.23と他町村と比べても決して高いわけでもなく、厳しい経済状況の中、村民とによるまさに協働の村づくりの結果として全国4位には村民として誇りであり、また素晴らしいことです。

これまで行政サービスの受け手だった住民が、新しい公共の担い手としてこれまで行政が担ってきた公の領域が民が参画して協働して支えていく仕組みを取り入れたり、検討している自治体も多くなってきたようです。まさに伊藤村長方式であり、下條型であると感じます。

さらなる行政のスリム化を推し進めるために、どのような経費削減策を行っていかれるかお尋ねします。

一方、村民の生活はかつてないような「就職難」が象徴するように、厳しい経済情勢下、収入所得がともすれば下がっていく状況となっております。そうした中、下條村で近年取り上げられている生活支援の主な施策は、子育て支援として高校生まで医療費無料、保育料の軽減、給食費の減額。福祉関係において各種健康診断、予防接種、ワクチンの接種費

用の補助。国保税においては、各自治体が引き上げているのに対し5%の引き下げ。高齢者に対して無料タクシー券の増。後期高齢者医療費自己負担分の1/2の補助。介護慰労金。合併浄化槽について、水質検査料、点検料の3/4補助。清掃料1/2補助等々のほかの市町村で行っていない施策についても生活コスト削減策を行ってきており、大変ありがたいと思います。

年頭にあたって、村長のあいさつの中でも「所得が上がりにくい中で皆様の生活コストをより下げていくいくつも施策を積極的に行っていく」とありましたが、生活コストを下げる施策はどのような計画かお尋ねいたします。

以上です。

○議長（村松 積） 伊藤村長、答弁願います。

伊藤村長。

○村長（伊藤 喜平） 小池議員の質問にお答えいたします。

行政のスリム化と生活コスト軽減施策についてお話がありました。

基本的に1つ残念だなと思うことは、平成16年から行政のスリム化に取り組んだということでございますけれども、16年ころはどこでもほにほにとして始めた時分でございます。下條村は平成4年ということございまして、平成4年のまだバブルの余韻の冷め切らない中で、みんなが沸き立っておる中で、私は数値的に見て、こんなことでは国家が危ないよ、県が危ないよということで平成4年ころから取り組んだわけでございます。

やはり前向きな施策をしておる時に県が県の公務員体質で指導する体質が、今までのその当時の風潮でございましたので、私はそれを拒否して今日までやって、それが良かったなと思っておりますし、今高い評価もしていただいたわけございまして、今この機にいたって何とかせなければいけないということで、合理化する、スリム化するといったってもう幅がないわけございまして、いいほど絞られておる中でやろうと思っても成果は上がらないのかなということは、泉崎さんでもちょっと言われましたけれども、なるほど早くやって良かったなということございまして、これはコロンブスの卵と同じでございまして、あの時にやっておけば良かったなというのは皆言ってくれるわけございまして、その時はできなかったという中で、職員諸君も本当に一生懸命、職員諸君なんていうのはあの当時は神様みたいなもんでございまして、地方公務員さままでござい

ました。ここにもおりますけれども。

その時代にやるということ。何かやろうと思うと自治労からおるのが来てわっしょいわっしょい。今のその来た幹部が長野におりますけれども、よく幹部が「よく村長さんやりきったな」って褒めてくれますけれども、今ごろ褒められてもぱっとしないわけでございますけれども、評価していただいたということは悪い気はしないわけでございます。

そこで職員諸君もご承知のように、だいたい類似町村の55%ぐらいでやっております。一生懸命やっております。ここで今言ったように、私もあえて施政方針の中で細かく時間を割いてやったわけでございますけれども、今議員が言ったとおりあのように生活コストは下がってきておると思います。何よりもこれだけ混乱してどんなふうに船が荒れてどこへ漂着するかわからんこの状態の中で、下條村の村民の皆さんというのは、精神的にも、そしてまた財政的にも、安定しておられるということはこれはありがたいことであろうと思います。ちょっと地方交付税が5%も下げられたら沈んでしまうというところが非常に多いわけでございますけれども、そうした依存体質でない。しかも議員が指摘していただいたように、財政力指数も中の下くらいの中で入りを計り出を制する。そして無駄を省くということはこれはいつまでやるんだ、どうするんだと、これは永遠の課題でございます。無駄を省くということになると、よっぽどトップがしっかりしていないと、ぼけた組織の中で、そして肥大化した組織の中で、そして責任感のない組織の中で無駄を省くなんていったら今の国の官僚組織と同じでございます。いくら事業見直しでばんばかばんばかやっても、こっちでまた無駄をしておるようなことが平気であるわけでございますけれども、あまり組織が大きくなるということ、それから責任体制というのはしっかり確立しなければいけないということと、あえて今職員諸君に望むことは、もう少し質を上げてくれということでございます。なかなか勉強はしておるんですけども、テレビもあんまり新聞も読んでおるふうはないし、テレビはきっと教育テレビばかりうちへいったら見ておると思うんですけども、今はさっきも冒頭の中で申し上げたように、それじゃどこかで例えばイラクで何が起きたときはユーロも原油もばんばかと上がると。これは危ないなと思ったときにどういう体制にするかということが非常に大事でございますので、それは幅広い視野を常に持っていただかなければいけないということと、「私はテレビで画像で勉強しておるよ」と言うんですけども、画像というのは非常に思考力を弱めるわけございま

して、そこで瞬間的にこういう画像が出て、また次の日にこの画像が出て、その次の日にまたこの画像が出る。この画像は徹底した正しいんだなというふうになります。

マスコミというのは、公のシステムを使っておるわけでございますけれども、なかなか責任持たない。国もマスコミにあまり責任追及できない。責任追及するとしっぺ返しくるということで、悪いふうの負の遺産、負の連鎖があるわけでございますし、私はとにかく新聞を読んでくれということで、活字というのは今下條村も含めて活字離れが非常に進んでおります。住宅見ても住宅のポスティング私たまに朝のぞくわけでございますけれども、半分だな、新聞入っておるの。そうすると映像だとかインターネットで引きづりゃいいじゃないかという。それはインターネットはインターネットで、局所的にはものすごい正確なものが出ます。局所局所で。全体的に見れないと。

それで映像は思考を働かせる余裕がないと。視覚に訴えてこれが正しいんだと、ワイドショーは絶対正しいんだと。時には憲法より正しいんだというような洗脳されてしまうわけでございます。その傾向があっては困るということ、せつかくここまできたんですからこれからは活字を見る。新聞も含めて、新聞たつてよたつた新聞じゃ駄目なわけございまして、中性公立に近い新聞を見て、そして文章をよく見て咀嚼して、そしてどうあるべきかということを経時に考えるということを経時から一生懸命やっていくつもりでございます。しかし、一生懸命やってくれるということでございます。

それで今コストを下げるということは予算とおりでございますし、特に今日議長さんもおるわけでございますけれども、この前もちょっと話したと思うんですけども、阿部知事と語る会、公開でありました。その時に公開というのは一般人も入るわけでございますが、その時に「下條村さん、その老人、高齢者あれもいいけれども、苦しい胸の内でございますけれども、もう少し歩調を合わせてくれ」と国に行ったときに「何を言っておるんだ」と「下條村がやっておるじゃないかこう言われたら困るし、もう1つ胸の内は14市町村の中で、どうかある程度は歩調をとっていただきたい」ということもちょっと言葉をおわしたわけでございます。私はその時に「わかった」ということでございますけれども、その時に「高齢者の半額負担、これは知事さんがなんとと言われても私はやらしていただく」と。これは3年も4年も前から計画し、こうした反響が出るだろうということで危惧しておったんですけども、どうももうまちきれんということで「これはどんなことを

してでもやらしていただく」ということで言い切りました。

しかし、これはこれとしても、あまりにも今、広域の中でやっておるところで下條村だけが独りよがりであることが下條村にとってプラスになるかならないか、面と向かってはなかなか村長たちは言わんのですけれども、時々ちらっと聞こえてくるわけでございまして「あれだけやられちゃ」ということでございますので、そこらもただマクロ的に下條村良ければいいじゃないかと。下條村だって国庫補助がなければやらないわけでございます。みんなの今の災害でもそうでございますけれども、みんなのお力を借りなければやらないわけでございますし、この地域が発展するのはみんなが良くならなければ発展しないわけでございます。特にリニアだとか三遠南信を含めると、広域的な本当に万全な体制をとるには、みんながスクラム組まなければいけないということでございますけれども、どうもちょっとエンジンのかかりが遅い町村もあるわけでございますけれども、いずれは協調しながらオンリーワン、エコノミックアニマルではいけないということでございますので、そこの辺の調整が非常に難しいということと、私はくどいようでございますけれども、職員にも世界的な視野で物事を判断すると。それも瞬時にしなければいけない。瞬時というのはすぐやれということではないんですけれども、それをどこかたなざらしにしてそしてもたらもたらしておるということはいけないわけでございますので、そんなことも私の役目としてこれから適当に一生懸命お互いに研鑽していくつもりでございますので、ご理解いただきたいと思っております。

○議長（村松 積） 1番、小池昌人君、再質問ありましたらお願いします。

1番、小池昌人君。

○1番（小池 昌人） すいません、最初に先ほど14年という話の行政改革という話ですけれども、ちょっと言い方が言い回しの言い方があれですけれども、平成16年にいち早く自立の選択をされというところで一区切りですのですいません。

それから行政のスリム化という話の中で、伊藤村長就任当時、「下條村も県のトップの方のトップ集団になりたいんだ」というふうに思われたとお聞きしましたけれども、そのトップ集団を目指すためにそういった政策を実行されまして、全国で4位という奇跡の村というふうに表されているところもありますけれども、なったわけでございます。

下條村の実質公債費の推移を見ますと、年々下がってどんどんどんどん下がってき

ておるわけですがけれども、このままでいくと4位ということではなくてももう少し上がっていきような感じがするんですけれど、そこら辺見通しのどうですかね」ということが1つあります。

それで住民の皆さんにやっていただけることは今後どんどんやってもらうんだと。地域の自分たちが地域は自分たちで守り、そして作っていく。村を愛する郷土愛とかお互いに助け合うという形の中で、経費削減とか合理性ということがなっているかと思うんですけれども、村民は必ずしもこの全国上位になることを望んでいるわけでもないと思うんですよ。もう少し今非常に生活コストの削減等自立した施策をやっていただいておりますが、もう少し何とかならないかなという部分を感じておる部分はあると思うんですが、その辺の村長のお考えはどうかなという部分と、生活費の関係について前も質問させていただきましたけれども、最近多いのはやっぱり高校卒業後の進路の関係の進学、学費の関係。それから介護の関係が非常に大きな負担になっている部分かなというふうに思います。

その部分2つと、それから今本当に非常に話題になっている名古屋市の河村市長が代表を務める「減税日本」ということも話題になっておまして、世論調査でいくと25%を超える支持率を受けて第1党になるんじゃないかというような話題も出ておりますけれども、村税の引き下げ等にも着手するお考えはあるのかということについてお聞きしたいと思います。

○議長（村松 積） 伊藤村長。

○村長（伊藤 喜平） 今、一生懸命やりゃやってまたいろいろの考えがあるんだなということでございます。

これだけ国ががたがたしておるときに、実質公債費比率なんかもう下げんでもいいじゃないかと、これは暴挙というしかないと思います。これは明治の初めかバブル期の議員さんの言うことであって、冗談じゃないよと私は言っておきたいと思います。そんなに甘いもんじゃないということ。

それから国が何で公共事業費を13%まで下げたかと。これは苦し紛れで人からコンクリートへ、そうでなくてコンクリートへ回す金がもうないと。コンクリートへ回す金というのは投資的経費でございますので、必ずや悪い方へ使っては駄目なんですけれども、必ずいい形で後世に残る。あまりやり過ぎてはいけないんですけれども、その道すら自分で

閉ざしておるということ。こんな政権の中で、そのゆでガエルのようで、ゆでガエルの原理は知っておると思うんですけども、いい湯だなといって入っておってだんだんだんだん熱くなると出ることが忘れてしまっていい湯だなということでそこで死んでしまうと。熱いお湯にしておけばそこへ飛び込んですぐ飛び上がるということでございますけれども、どうかゆでガエル現象にならないように。

国の周りもそうでございます。平和だ平和だと平和ぼけておるわけで、その平和が一番いいんですけども、このごろは東シナ海は横行されてしまう。そして北方列島もどんちゃかどんちゃか取られてしまう。こうやっておるだけで、これがゆでガエル現象ということでございます。それが裸になってみたら何にもまた取られて取られて取られる。国の一番重要な施策すらできないというのが今の政策でございます。

そうすると今の政権ももう駄目だよといってありがとうございましたといって総辞職した場合に、我々国民はどうやって生活していくんだかという問題があります。

それから村は一生懸命やっておるけれども、みんな就職ができんじゃないかと。それはもう少し国も力をつけていただいて、全体なボトムアップをする政策をしてくれなければ、今1人就職50万円ずつ出しております。高校生の就職。そんなものは出したって基本的な仕事がなければどうしようもないわけでございますので、どうかその時代に合ったもう少し緊張感を持って、もし村民がそういう人が「おったらそうじゃないよと。俺は村会議員だよ」と。「ここまで勉強しておるんだからおまえこうだよ」というふうに説明していただきたいと思います。

それと同事に、ちょっとがくんとしたんですけども、ぜひその外野的な意見はやめて、私どもはこれだけの財があって、その中から恒久的に出しておるわけでございます。何にもない政党が子ども手当もつはずがないんですけども、一年目でもう破綻しちゃって、あれで赤字国債38兆円認めないということになったら手も足も出ないわけでございます。そんなことで村民が幸せになれるのか。今度は政権ががらがらして、交付税だって当然減らしてくると思う。そうしたときに皆さんえらいことになってくる。そんな瞬間的な平面的なことを言って村政がやっていけるか、本当にみんなが幸せで安心してやる気のある村づくりということになると、安心ということは安定でなければいけないということ。それから無駄を徹底的に省かなければいけないという精神でやっておるわけございま

して、ちっとばか今ほにほにしてそいじゃ将来的にいくつになるんだという、これは対外的な要因があって、下條村は全部自主財源でやっておるんならよしいくらでなります。それでも難しい。企業がどのくらいの動きをするかということ。これは国の施策によっても違う、収益が違って来るわけでございますので、その地方交付税不交付団体ならばその数字は出る。大まかなものは出るけれども、基本的に地方交付税をいじかまれたらどうなる。3億円も4億円もいじかまれたらこれも相当数値が違ってくると思うわけでございますので、もう少し掘り下げてまたひとつお考えいただきたいと思っておりますので、何かそのちょっと愕然としたもんで言っただけでございますけれども、ぜひまた若い方でございますので、大いに勉強して行って、大まかなスキルだけ国のスキルだけはきちっとつらまえて、そしてこれは大変なことだよということ。

ひとつそいじゃ例を見ますけれども、これはもう非常に危ない発言でございますのでそのまま言いますけれども、一週間ほど前かな、衛生組合のその日の包括医療の話がありました。包括医療の役員会がありまして、行ってまいりました。医師側からも20人くらいで、私どもにも2人くらい出ていろいろ話をいたしました。

その時に某医師がなんと言ったかということ、「おえ我々は本当にもう意識改革をしなければ駄目だよ」と。あれドクターヘリの話が出ました。とんでもない話だと。佐久に今1機常駐しております。これを南信に持ってこいということでやったんですけれども、全県下の医師グループの中ではやってみたところがこれは松本へ置けと。ということは緊急医療でございますので、誰かぼーんと大重傷の人が入ってきたときにこれは即スタッフを置く。それも最低6人いるそうでございます。それでやっているときにまた1人入ってきたら手が付かないじゃないかと、いくら市立といえども。

そういうことで、救急ヘリを常駐させるということになると、そのくらいの2人や3人は処理できるような体制にしなければいけないということが、県の医師会の方向で信州大学に決まったわけでございます。

その時にこちらのお医者さんも「冗談じゃないか」と「こんなもの絶対置くべきだった。県議員は何やっておる」なんていうような話も始まったところでございますけれども、その時にある医師が「おえ我々は本当に反省期だよ。反省をする時期だよ」ということで、どういふことを言ったかといったら、「我々は高度医療だとか、なんとしてもその患者を



救うんだとかいうことだけに走って、無駄に医療資源を相当無駄に使っておりませんか」と。「こんなことでは今の国の状態を見るときに非常に日本の医療体制はいいものがある、素晴らしいものと。全地球的に見ても非常に完全にいいとはいわんけれど、非常にいいものがあるという中で、そんな組織をあぐらをかいておって、国の今の状態を見て持続できるのかできないのかと、そこを考えなければいけない」ということで、その次から問題なんだけれども、例えばご高齢の患者さんが出た、ご高齢。もうちょっと具体的に言ったんですが、「ご高齢の患者が出た。そうしたらこう出たらすぐヘリで信大持って行け、市営病院持っていけ。そして手術をする。意識が戻らない。そこへ今度へ胃に穴をあけるの胃ろうというそうでございますけれども、胃ろうで2週間も3週間もやって意識が戻らなくてお亡くなりになっていく例を私は何例も見ておる」と。「同じ医者としてこれは忍びない」と、ここに実際の方もおるんですけれども、今自治体の国保運営だってもう大変じゃないかと。「そういうときに、私たちはただ医療資源をそんなことで無駄に使ってはいけないよ」と。

そして「その年寄りにだって死ぬ尊厳があるんだと。それをもうヘリコプターで連れ回して、そして管をいっぱい入れて、胃にもう穴開けて、ただ呼吸を助ける。これは暗に慎まなければいけない」と言ったときに、みんなドクターというのはなかなか自己権利力が強いんですけれども、みんなシーンとして、それに対しては反論が当然あるわけ。「わたしはこうこうこういう実例があってこれで最後はちょっと遅れたために足を切断してしまった」とかいうような例はあるんですが、私は医師会から、行政の側でなくて医師会の医療費を受け取る方の中からこの声が出たというのは本当に画期的だということで、私ちょっとごちそうになってすぐ医師会の会合というのは夜7時から始まる。長いと8時半ごろ。8時半からいづらか懇談会をしますで用意してありますなんて、うまくないちっと飲んでうれしく帰ってきてうちで飲んだんですけれども。

みんなその意識にならなければ、もらえるものはもらえるよと。こうやっておれば何とかなると、この初期段階というのはもう完全に済んで、もう終末医療に日本の状態が終末医療に入っておるとのこと。あのドクターですら「こんなことは続かないよ」と言ってくれたということは非常にありがたいことだと思って、この現実を私も20年やっておるけれど、ドクターは「金をよこせ、もっと診療費を上げよ」そしてこの前歯科は1点何%

上がったけれど、普通のお医者さんは「けしからん」なんてそういう声は当然起きるんですけども、この逆な形。医療資源を大事に使えと。使わなければいけない人に使えんようになっちゃうよという、この警鐘を鳴らしていただいというのはありがたいこと。

これプロの立場で言うわけでごさいます、私どもがそんなこと言ったらえらいことでごさいますけれども、それも一理あると。

そういう時代でごさいますので、もうちょっとその標準を定めてやっていただきたいと思えます。

○議長（村松 積） 1 番、小池昌人君、再質問は。

一般質問の途中でございますけれども、ただいまより 1 3 時まで昼食のため休憩いたします。

休 憩 午前 1 1 時 5 7 分

---

再 開 午後 1 時 0 0 分